

示唆してくれている。「年齢差別」問題は、実は、年齢を超えた社会的、政治的、経済的問題であると同時に、グローバル化が一層進むなかでの国際的な政治的、経済的、文化的な問題なのであることを本書は訴えているのである。

評者としては、誰よりも先ず、生活協同組合・高齢協と労働者協同組合連合会それに事業団の組合員、経営陣、関係者に本書を読むよう勧めたい。これも、「隗より始めよ」である。

## BOOK REVIEW

書 評

# 『社会的企業とコミュニティの再生』

中川雄一郎著 2005年4月、大月書店(2400円+税)

島村 博(協同労働の協同組合法制化市民会議事務局長)

『社会的企業とコミュニティの再生』 中川雄一郎著



本書は、内容が極めて多岐にわたり、イギリスにおける協同組合運動・理論を回顧しつつ、現代のコミュニティ・コープに説き及ぶ。雇用・くらし・コミュニティに視座をとり、理論と実践とをバランスよく紹介しながら、「協同労働の協同組合」の法制化の意義を、政策的効果を含め解明したものである。法制化運動に弾みを与える好著である。

また、社会的協同組合の入門書としても、21世紀の協同組合がたどるべき道を示す理論書としても、今後において必ず参照されるものとなるのではないのか。

内容を概略的に示めしておこう。まず、協同組合運動が歴史的に果たしてきた役割を確認(第一章)しつつ、サッチャリズムで知られる経済・産業・社会福祉政策上での大転換期に脚光を浴びたCDA(協同組合開発機構)の登場と退出を跡づけ(第二章)、コミュニティ協同組合の先駆的経験を概観し(第三章)、社会的企業の定義を試み(第四章)、2002～2004年度にかけてフィールド研究が行なわれたダーリントン市(第五章)、サンダーランド市(第六章)、ロンドン市(第七章)での社会的企業の経験を記し、結びとして協同労働の協同組合法の必要(第八章)を訴えかける、という構成となっている。

本書の構成を一瞥しただけでも、理論と実践との結合をめざすものになっていることがお

分かりいただけと思う。「<sup>エンピリカル</sup>経験的」といわれるイギリス人の面目躍如たらしめる多様な実験、そして当然の如く挫折、その教訓が前半部分のモチーフを為している。対して後半部分からは、ジョンブル気質そのままに挫折を苦としない新たな挑戦の意気込みが伝わってくる。新しいことに挑戦する気高い理想とガッツがしっかりと伝わってくる。

本書の全体を貫く筆者の価値は「シチズンシップ」(115-118頁)に置かれている。ドイツ語圏では、さしづめツィビルシャフト(Zivilschaft.ただし、こういうドイツ語はない。Bürgerschaftを前提にした評者による造語)とでも言おうか。Keith Falkusの所論に依拠した意義づけであるが、自治を根幹としコミュニティ起業をも射程に捉える観念であることが充分説得的に展開される。「公共哲学」論者たちが打ち出す「市民社会」はアソシエーションを中心とするが、筆者は「平等な個人による自治」と「平等な権利」により相互補完されるシチズンシップを基盤とする社会的企業の定義づけを行なう(p.118-119頁)。とともに、本書全体をこれまた貫く危機的な現状に対する有効な解決の仕組として提起する。

評者は、筆者による綿密な調査の成果(第5章～第7章)に学ぶところが多かった。定点観測を続けると、当初の仮説が修正されたり、逆に新しい発見があったりして、なかなか一書にまとめることは困難である。しかし、労働者協同組合運動の現代的意義とそれが有する可能性に早くから注目してきた筆者ならではの仕事、調査として、読後感はずしりと思ひ。

今後においても、CDAの挫折が再び繰り返される恐れもあるが、筆者が立脚する価値は、成功も失敗も包容する奥深いものであり、法制化運動に携わる立場から失敗を糧となしうるジョンブルの「<sup>エンピリカル</sup>経験的」態度に深い感銘も覚えた。